

山梨県の満州開拓団の悲劇

【テーマ設定理由】

僕は、小学校5年生の時、豊小学校に勤めている母に勧められて、豊村満州開拓団の悲劇をまとめたDVD『山梨放送戦後70年特別番組』を観た。それから、母が、満州開拓団のことを話してくれたけれど、こわくて聞き流していた。しかし、ウクライナとロシアの戦争が始まってから、今までより戦争の話に耳を傾けるようになった。特に、満州開拓団のことは学校では勉強したことがなかったので、ちゃんと知りたいと思うようになった。なぜ軍人でない人たちが満州に行かなければならなかったのか、なぜ満州で死ななければならなかったのかを知り、レポートにまとめたいと思った。

【調べた内容(目次)】

- ① 模範村「豊村」
- ② 満州移民計画
- ③ 豊村分村計画～「四道河豊村」の誕生～
- ④ 移民のかたち
- ⑤ 豊村開拓団の悲劇～集団自決～
- ⑥ 見捨てられた人々～開拓民は現地に踏み留まれ～
- ⑦ 開拓団の人々の戦後
- ⑧ 団長の息子として生きる～名取義晃さんの話～
- ⑨ 感想・考察



【①模範村「豊村」】

豊村は、明治8年1月にできた。昭和35年に櫛形町、平成5年に南アルプス市となる。荒れ果てた砂礫の草原で、住民は生活をしていくのにすごく苦労した。水がなく米は育たず、畑作地帯だった。江戸時代には、たばこ産業、明治時代には、日本を代表する養蚕地域(桑畑)となった。現在は、果樹園が広がる。

昭和のはじめ、世界の経済が一気に崩れ、豊村の養蚕業もどん底に落ちた。一年の収入は半分に減り、給料よりも農具を買うお金や生活費、国におさめる税金の方が上回り、90%以上の農家が借金暮らしとなった。国は、「生活の仕方を工夫して乗りきりなさい。」と言い、それまでと変わらず、一日を生きるのだから精いっぱい国民から税金をとりたてた。豊村は、苦しい生活の中でも、国への税金を毎年完璧に納め続け、国から2回も「模範村」として表彰された。『豊村』にも次のように書いてある。

先祖は、此の天恵の薄い土地で、励まし合い、助け合いながら協力一致して、この村を哺育育ててきました。そうして、全国においてもまれに、前後二回も、模範村として大臣から表彰されたのでもあります。これは全く、全村民が一丸となって、刻苦勉励・互譲の精神を以つて、村づくりの大綱に協力邁進されたと賜。

このすばらしい豊村の人たちの気持ちだが、後に、国に利用されることとなった。

【②満州移民計画】

刻苦勉励こつくべんれい：心身を苦しめてつとめること。互譲ごじょうの精神：互いに譲りあう心。(広辞苑第四版)

日本は、ヨーロッパで第一次世界大戦が起こっている中、「中国」に支配を広めようと考えた。関東軍は、南満州鉄道を爆破して満州を占領し、昭和7年、中国の北東部に、「満州国」をつくった。関東軍が実権をにぎる「満州国」は、他の国からは、正式な国として認められなかった。

関東軍：日本帝国陸軍の満州駐留部隊で、大きな権力を持っていた。『満州開拓の歴史』より

昭和11年、関東軍は、満州国にたくさんの日本人を送り込む計画を立てた。その目的は、満州国を他の国から守らせるためだった。「五族協和」「王道楽土」というスローガンを立て、20年の間に100万家族(約500万人)の人々を満州に送り込むと動き出した。

五族協和：日、満、蒙、漢、朝鮮の5つの民族が力を合わせて国を発展させよう。
王道楽土：仁徳をもとにした理想のづくりをしよう。

その頃、豊村の人々の生活は、苦しさを増すばかりだった。豊村では、農家一軒あたりの畑の面積が狭く、子どもに十分な食べ物を与えることができない家もあった。



国は、豊村のように、一軒あたりの土地が少なくお金に困っている村に目をつけた。特に目をつけられたのが、苦しい時にも税金を納めた、国の言うことをきく「模範村」だった。



満洲への移民を募集するポスター
(大原千和實さん所蔵)
図録『満蒙開拓平和記念館』より

【③豊村分村計画 ～「^{スードーホー}四道河豊村」の誕生～】

国や山梨県は、豊村に、「経済を立て直すために、満州に移り住まないか。」という話を持ちかけた。急にそんな話を持ちかけられても、村の人々はよくわからなかった。県の担当者は、連日村に来て、村の人々に満州行きをすすめた。村の人々の「苦しい時も、村や国のためにみんなで協力しよう。」という協同の精神につけこんだ。

- ◎満州に行けば、一人十町歩（約10ha）の土地がもらえる。十町歩：当時の豊村の農家の20倍以上の広さ
- ◎分村すれば、農家一戸当たり千円の補助金が出る。当時の千円：現在の300万～400万円くらいの価値
- ◎分村すれば、満州の大地でとれる食料により、ふるさと豊村も豊かになる。
- ◎次男や三男がこんな村にいても明日はない。自分のため、親兄弟のために行くのだ。

豊村の人々は、「やせた土地に頑張って生きて先祖からゆずり受けたこの土地を離れることはできない。」「ここは唯一のふるさとだ。」という先祖を大事にする思いを強く持っており、満州行きの話は進まなかった。「夢のような話であるがあまりにうまい話には危険な匂いもする。」と言って反対する人たちもいた。県は、「豊村の人々をなんとしても満州に送り込む。」という強い気持ちで、村長さんに、「満州に行けば、村に補助金を出す。行かなければ、豊村には補助金は出さない。」などとおどしのようなことも言って満州行きをすすめた。村長さんは、「知らない土地に行く事なんて考えられない。」「豊村の人々は、これからも、この地で、みんなで助け合って生きていくんだ。」という考えだったけれど、県の指導者からの強い言葉に、次第に、「村の経済を立て直すためには満州に行かなければならないのかな。」という思いになっていった。

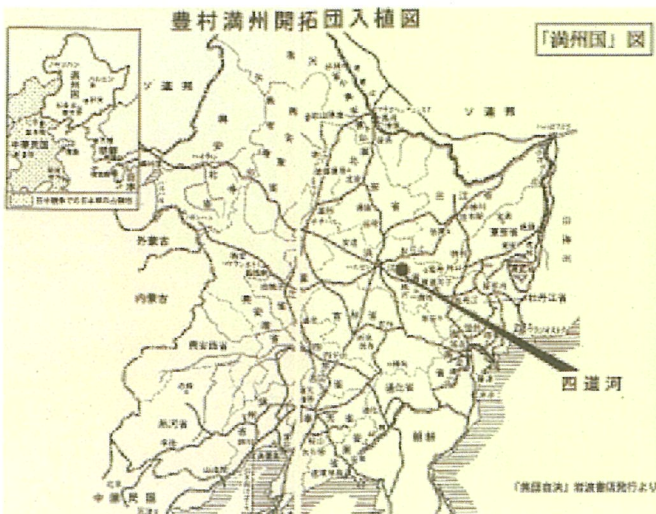
『山梨県史 資料編15』には、豊村のように、満州移民の講演や映画の上映をしてまわった町村の数は、「実におびただしい数に上る」とある。

昭和14年1月8日、豊村の集会が開かれた。三百戸を満州に行かせることが決まった。村長さんは、自ら開拓団の団長を引き受け、次の日から満州に行く人を集めた。村長さんだけじゃなく、小学校の校長先生や先生たち、消防団の人たちも、次男三男がいる農家を訪ね、必死に説得を重ねた。説得された者が32名いた。村を思い、親や兄弟を思いやるやさしさが、最後の決断をさせた。決断した人々には、「村のために行く。」そして、「満州に行けば関東軍に守ってもらえるから大丈夫。」という思いがあった。

集会から二日後の昭和14年1月10日、24名が準備のために先に満州に出発した。その年の9月に第二次世界大戦が始まるとは、誰も想像していなかった。先遣隊が満州の地に着くと、県の担当者の話の通りの広い土地や風景に安心し、肥えた土地で肥料なしで育つ作物に驚いたようだ。その土地が、中国人から強制的に安く買ったり奪いとったりした土地だったことも、誰も知らなかった。また、必要ない人間を満州に行かせ満州国を守らせるという国の本当の目的も、誰も知らなかった。

昭和15年6月、満州国滨江省阿城県四道河に分村豊村が誕生した。昭和20年の5月まで数回に分けて村の人々が満州に渡った。開戦時、55戸165名。

『四道河にねむる拓友に捧ぐ』より

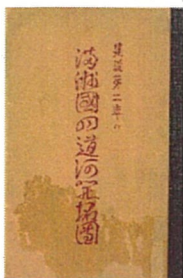


四道河神社境内ヨリ眺メタル三道河部落（豊村開拓団の人々が住む部落）の全景
昭和16年満州豊村で作られた写真集『建設第二年の満州国四道河開拓団』より

『四道河にねむる拓友に捧ぐ』より

四道河豊村の生活

昭和16年、四道河豊村では、一冊の小さな写真集が作られた。生活がようやく軌道にのってきたことを祝って出されたものだった。開拓団の人々は、確かに広い土地をもらい喜びが大きかった。広い土地なので、苦力(クーリー)と呼ばれる中国人を雇ったり、小作人として中国人に土地を貸したりした。家族みんなで力を合わせて朝から晩まで一生懸命働いた。満州でも、ふるさと日本と同様に、多くの人が住み基地を確かなものにするために、人間を増産することが求められた。「産めよ、増やせよ。」の号令のもとで、満州でも急速に子どもの数が増えていった。



昭和16年満州豊村で作られた写真集『建設第二年の満州国四道河開拓団』より

(データ：名取義晃さん所蔵 実物：南アルプス中央図書館所蔵)

【④移民のかたち】

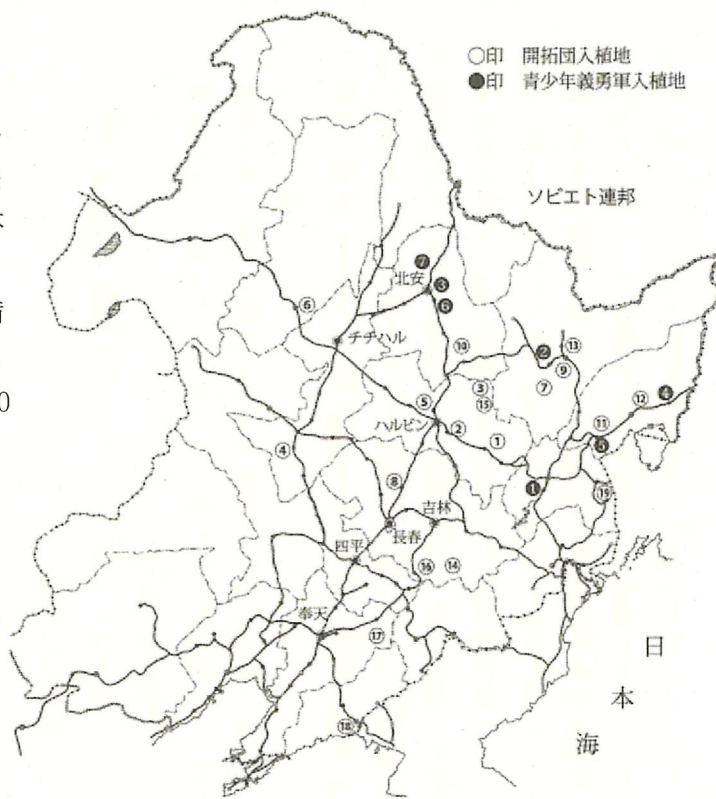
ぶんごう

分村移民と分郷移民

「分村」とは、村単位で移民すること。「分郷」とは、数カ村がまとまって移民すること。豊村のように、山梨県で分村計画の指定を受けたのは、25カ村あった。しかし、人数が集まらないなどで、実際に分村移民をした開拓団の数は多くはない。豊村開拓団遺族会会長の名取義晃さんの話によると、山梨県には、主に8つの団体があつたようだ。個人で他県の開拓団に入った人も多くいた。豊村の人でも豊村開拓団ではない開拓団として満州に行った人もいる。僕の住む若草地区の鏡中条からも24名が第七次八道河子開拓団(関東4県と山梨県の860人の開拓団)に入っていたことがわかった。

山梨関係の主な開拓団・青少年義勇軍の入植地

- | | |
|-------------------|---------------|
| ① 帽兜山 | ⑭ 八道河子 |
| ② 四道河豊村 | ⑮ 王家屯富士見村 |
| ③ 大宮 | ⑯ 興隆川東京郷 |
| ④ 二昭山梨 | ⑰ 富士郷 |
| ⑤ 方台三富 | ⑱ 老古溝煙草・五竜背煙草 |
| ⑥ 秀峰増穂 | ⑲ 大肚子川農工 |
| ⑦ 広富山南都留郷 | ① 高千穂 |
| ⑧ 山梨県報国農場・甲府市報国農場 | ② 南又 |
| ⑨ 千振・八富里・日高見 | ③ 八栄 |
| ⑩ 瑞穂 | ④ 完達嶺 |
| ⑪ 哈達河 | ⑤ 北桜 |
| ⑫ 永安屯・黒台 | ⑥ 善隣 |
| ⑬ 東海 | ⑦ 竜門 |



『山梨満州開拓団小史』より

青少年義勇軍

日中戦争の広がりによって、日本の青壮年(16才~50才くらいの人)は、どんどん戦地に送られ、いなくなつた。国は、満州に行かせるのにちょうどいい年齢の人がいなくて困つた。そこで目をつけたのが、兵隊に行くまで間がある13才~14才の少年たちだった。国や県は、小学校の先生たちに命令し、少年たちを満州に行かせる教育をした。先生たちは、授業中に、満州のいい話をした。「満州は、いい所だ。生きてさえいれば、将来20町歩(20ha:東京ドーム約4.3個分)の地主になれる。それは、お国のためにもなるんだ。」などと。満蒙開拓平和記念館で観た映像の中には、「毎日のように満洲に行けと言われた。」「満州に行くというまで校長室に立たされた。」という証言もあった。「うちのあととりだから満州にやるわけにはいかん。」と言うお父さんお

【⑤豊村開拓団の悲劇 ～集団自決～】

昭和20年5月、満州では、ひそかに、国から、「村を防衛基地化せよ」という命令が出た。昭和20年（1945年）8月9日、ソ連の参戦で開拓団の生活は一変した。

しかし、四道河豊村の人々は、ソ連の参戦を知らず、日本の敗戦の色が濃くなってきた状況に気づかなかった。

昭和20年8月13日、終戦の2日前、突然、四道河豊村にも、大量の召集令状が届いた。男の人たちは、「満州に行けば、兵隊の召集はないと聞いていたのにおかしいな。」と不安を感じながら兵隊に出た。村に残されたのは、女、子ども、年寄、開拓団の幹部だった。

兵隊に出て行った人たちと入れ替えに、5台の荷馬車が村に入ってきた。荷馬車には、ダイナマイトが大量に積まれていた。

8月15日、終戦をむかえると、反日感情を持っていた中国人や参戦したソ連軍があちこちの開拓団集落に攻めこんできた。家財、命、すべてをうばっていった。『満洲開拓史』には、「開拓団は、北満辺境地区に位置するものが多く、そのため、開戦も終戦も徹底せず、しかも、有力な青壮年男子が召応不在であったため、事態を最高度の混乱におちいらせた。」と書かれている。四道河豊村も時間の問題だった。

『豊村』には、次のように書かれている。「8月16日と17日、避難する準備をしていたところに、反日感情を持った中国の人々が攻め込んできた。最初は、銃やダイナマイトで撃退したが、17日には四方を囲まれ8名の戦死者が出た。弾薬はなくなり、負傷者も増え、戦力がなくなった。負傷者を連れての脱出は不可能と考え一同自決することに決めた。本部の建物に集合し、中央にダイナマイトを積み、点火、自決した。戦死8名、自決140名、爆傷に起因する死亡1名。」終戦から2日後の8月17日、全部で200本あまりのダイナマイトが積み上げられ、「広い大地で作物を育て、ふるさとの力になりたい。」という気持ちから満州に行った人たちは、みんなで涙を流しながら君が代を合唱し、141人で集団自決をした。そのおそろしい爆発音は、周囲の山々に響いたそうだ。0才の赤ちゃんから70才のおばあちゃんまで、140人以上の命が消えた。『豊村』には、亡くなった人たちの出身地や氏名が記録されている。

豊村開拓団の集団自決の事実が今に伝わるのは、命がけで、その事実を伝えてくれた人がいたからだそうだ。それは、豊村開拓団の人々と集団自決に加わった新潟県出身の中谷栄三郎さん（当時45才）。中谷さんは、兵隊で召集された豊村の男の人たちに村の最後を伝えなければという思いで、大火傷をおいながら一カ月間歩き続け、阿城の町の収容所にたどりついた。中谷さんは、自決の様子を泣いて話した時点で息はなかった。「自分の責任は全部果たした。」というように安堵の顔色だった。

中谷栄三郎さんの苦勞と団長の苦哀の程は万策にも優る行為であったと思います。団長の意志としては、言うまでもなく団員全員の安全脱出を考えにいて万策を講じてのことと思いますが、いかにせん地理的の悪条件と満人の暴挙には抗しきれぬと考えての決断であったことでした。 豊村開拓団民 故高橋慶次郎さん手記より

『四道河にねむる拓友に捧ぐ』より

生き残った命 ～集団自決で唯一生き残った石丸美知子さん(当時5才)の手記より～

部屋に入って目に飛び込んできたのは、大勢の人たちが大泣きをしている姿でした。あちらこちらで線香をたいていました。ドカーンというものすごい音とともに、誰かが私の体の上にのっかってきました。弟は死んでいました。姉が片方で私の手をつかみ、もう片方で母の手をつかみ、大勢の死体のある部屋から私たちを出してくれました。日本人が住んでいた家の押し入れに入って寝ました。母と姉は反応がありませんでした。中国人のおじさんが助けてくれました。食べ物など、自分の子どもよりも、私を優先して育ててくれました。昭和58年の中国残留孤児として日本に来たとき、実の父と面会できました。その後、たくさんの人たちの支援で、家族と日本に住めるようになりました。 『四道河にねむる拓友に捧ぐ』より

豊村開拓団遺族会会長の名取義晃さんの話によると、石丸さんは、今も、南アルプス市で元気に暮らしているそうだ。

もう一つの集団自決 ～豊村開拓団員遺児 花輪拳さん(当時小学生)の記憶～

昭和20年8月15日、一刻も早く豊村へ帰らなければとみんなで米を炒り、野菜の塩もみなどの保存食をつくった。16日の夜、全員が集まるということで家を出た。その途中で、突然、本部から大きな爆発の音。父が、「間に合わなかったか。本部ではダイナマイトを使って自殺したようだな。今夜は学校へ泊まって明日家に帰ろう。」と言った。その深夜、私たちが寝ている所へ地元の満人の襲撃があり、大きな石や煉瓦等を投げ込まれ大勢の人が銃で撃たれた。父はどうする術もなく満人の手にかかるより自分のこの手でと。闇の向こうにうごめく父の姿を見た。父は子どもの頭をなでているようだった。銃声が響いた。どすり、と誰かが倒れる音。しばらく

して、また、銃声。それから、倒れる音。銃口から火花が散っては消えた。一人ずつ倒れていった。父が近づいてきた。額に何か触れた。熱いような、冷たいような。銃口だった。何もできずに立ちすくんだ。がちん。金属が激しくぶつかり合う音。弾は出なかった。父親から離れ、床に伏せ、息を潜めた。ドアが開く音、そして銃声。いくつもの重い靴音が床に響く。目を閉じてじっと動かなかった。動けなかった。息を殺して時間が過ぎるのを待った。空が白んできた。ゆっくりとまぶたを開いた。床には石や煉瓦が散乱している。父は頭から血を流して倒れていた。家族も親戚もだめだとわかった。「また襲われるかもしれない。」草むらに隠れ、ダイコンやジャガイモを掘り出して、泥を落とし生のままかじった。野宿が続いた。数日後、家に戻った。何もかもが奪われていた。「これからどうしよう。」行き場はなかった。突然、家に男が入ってきた。「見たことがある。」父が懇意にしていた現地の中国人男性。手を引かれて男性の家に向かった。現地の住民が一斉に押しかけてきた。住民と男性の激しい争い。「日本人の男の子を出せ。」しかし、男性は、引き渡そうとはしなかった。近くを通りがかった日本兵にそっと預けられた。『四道河にねむる拓友に捧ぐ』

『山梨日日新聞 2002年(平成14年)8月17日土曜日(豊村満州開拓団 集団自決の夜4)』より

【⑥見捨てられた人々 ～開拓民は現地に踏み留まれ～】

召集された人たちが兵舎に着くと、関東軍は誰もいなかった。いたのは、馬だけ。戦況の悪化を予測した関東軍は、家族とともに安全な場所に逃げていた。関東軍が守ってくれると信じて満州に渡った人たちを見捨てて逃げたのだ。

駅には、満州に渡った日本人の避難民があふれていたようだ。電車のガラガラ空きの車両に乗ろうとすると、軍人に止められたようだ。「これは、軍用列車である。」と。軍人とその家族をのせた列車は、8月10日頃から目立っていた。ハルビン駅には、「開拓民は、現地に踏み留まれ」という張り紙が残されていたようだ。

逃避行

『四道河にねむる拓友に捧ぐ』より

『満洲開拓史』には、「各団は、荷馬車等に見廻り品を積み、延々長蛇の逃避行が開始された。それも敵の目を逃れるため、正常の道路を避け、密林に入り、大湿地を横切る等の難行軍の連続であった。足手まといの老幼は、南下の邪魔であると、子が親を殺し、親が子を殺し、南下の途中で捨てられた老幼病人の数は数えきれない。中国人に売られた乳幼児の数も数えきれない。それにもまして、主人がソ連と戦っている中で南下をした婦人が、中国人の妻とならねばならなかったのも多かった。」と書かれている。

山梨県の山梨村の避難民は、ハルビン収容所に入ったようだ。満州の冬は極寒の地。冬を越すために、さらに36kmの道のりを歩いて阿城の収容所に移ったそうだが、マイナス30度、地下1m50cmまで凍る地。一夜を越す体力も残されていない避難民は、追いかけて死んでいったようだ。収容所の空き地には、死体の山ができたようだ。



『満洲開拓の歴史』より 関東軍の対ソ連作戦図

『四道河にねむる拓友に捧ぐ』より

服毒や銃撃など方法は違うが、豊村開拓団のように集団自決をした開拓団が多くあった。『山梨満洲開拓団小史』によると、山梨県出身の人たちがいた開拓団も、襲撃や収容所での病気などにより大勢の死者(数千人)を出している。

令和5年7月30日、母と長野県阿智村にある「満蒙開拓平和記念館」に行ってきた。証言の記録から、おそろしい光景が見えた。

〈長野県泰阜村開拓団 中島多鶴さんの証言の記録より〉

逃げる途中、子どもを捨てちゃう人がでてきた。もうどうしようもないもので、子どもを川に流した。私も7人くらいまで流れていくのを見たんだけど止めてやることもできん、助けてやることもできない。

〈長野県河野村開拓団 久保田諫さんの証言の記録より〉

おばさんたちが我が子の首をしめだした。「何やってんの。手伝って。」とおしかりを受けて一生懸命子どもを殺すお手伝いをした。年が大きくなるにしたがって、「日本は負けてお父さんたちは戦死しちゃったからお父さんのところへ行くんだよ。」「はい。」って言うけど苦しいから抵抗しちゃう。ひもを結んで、とうもろこしの茎を2本はさんでそれをねじって殺した。最後に私ともう一人の男の人が残っちゃった。石で額を殴り合った。スコールがきて二人とも気がついちゃってあたりはしかばねの山ではなく海っていうか、73人の死体が転がっているわけよ。

〈長野県読書村開拓団 可児力一郎さんの証言の記録より〉

収容所では、しみ出る水をみんなに分け合って飲んだ。それで伝染病になり、飢えと寒さでみんな死んでしま

った。穴もすぐにいっぱいになり、学校の裏に積み上げていた。寒さで運ぶ力もなくなって死んだ人と一緒に寝ている状態だった。このままじゃ死んじゃうで、中国人の家へ逃げていこうということになった。中国人たちは、非常に貧しい人たちだった。だけど義理人情というのは、日本人に負けんくらいだったからおれたちは生き延びた。
『証言 それぞれの記憶』より

収容所の生活

収容所の場所	日本人が使っていた学校、倉庫など。 名ばかりの収容所で、土間やコンクリートの上にわずかにむしろを敷いた状態
苦しかったこと	着る物、食べる物が無い。お風呂に入れない。女狩り（ソ連軍が女性を強引に連れていかれた。） 冬の気温はマイナス30～40度
病気など	栄養失調　しらみによる発疹チフス、ジフテリア、麻疹、コレラなどの伝染病 病気になっても、医者も薬もなく、抵抗力のない6,7才以下の乳幼児はほとんど全滅するという状況。 病死者は、約7万人（開拓民27万人のうち） ソ連が侵攻した時の犠牲者：1万人をはるかにこえる数。

『満洲開拓史』『満蒙開拓の歴史』より

【⑦開拓団の人々の戦後】

中国残留孤児・中国残留婦人として生きる

関東軍に置き去りにされた避難民が、飢えと寒さの中でできたことは、我が子を中国人に手放すことだけだった。「産めよ、増やせよ。」でたくさん子どもたちに恵まれた開拓団の人たち。大量の子どもたちが中国人にもらわれていった。残留孤児は、約3千人いるといわれている。

戦後、中国と日本の国交が再開した後、肉親さがしで日本にはじめて来ることができたのは、昭和56年（1981年）終戦からすでに36年も経っていた。しかし、8月9日のソ連侵攻の日に満13才以上だった人は、自分の意志で中国に残ったとされ、肉親さがしの対象外にされた。満13才以上だった女性を残留婦人という。その人たちのほとんどは、日本の記憶も確かで身元が判明していたのに肉親さがしに参加できなかった。肉親さがしは、30回行われた。約2000人が参加、肉親が見つかったのは600人ほどだった。家族が亡くなっている、今の生活で精一杯であるなどいろいろな事情から、日本の家族と再会できたのはほんのひとにぎりの人たちだけだった。帰ることができた人も、中国語しか話せないため、単純な仕事にしかつげず、貧しい生活をした。言葉の壁や生活習慣の違いからトラブルも多く、差別を受けることも多かった。『満蒙開拓平和記念館』より

ふるさとではない土地で生きる

太平洋戦争によるふるさと豊村の戦死者は161名。ほぼ同じ数の人たちが満州の豊村から帰らなかった。全国で、27万人の人が満州開拓移民として満州に渡ったが、8万数千人が帰らなかった。

帰ってきた人たちは、ふるさとの人たちに温かく迎えられたと思った。『山梨満州開拓団小史』にも、「増穂村では、[増穂分村秀峰開拓団引揚者援護に関する件]として文書を住民に配布し温かく迎えるように広く呼びかけた」とある。

しかし、ほとんどの村では、家も農地も処分して満州に渡った開拓団員に帰る所はなかった。国は、全国各地の軍用地や国有林野を開拓地としてあつせんした。人々は、新たな土地を開拓した。しかし、生活に不便な場所であったり耕作に適さないやせた土地であったりしたため、農業がうまくいかず、出稼ぎに行くなど大変な苦勞をして生活を築いた人が多かった。

そして、「歴史を語り継ごう」とする人たちがいる一方で「満州から帰ってきたことは知られたくない」という人も多いそうだ。『満蒙開拓平和記念館』より

〈長野県水曲柳開拓団 熊谷義行さんの証言の記録より〉

「国策で開拓へ行った」と言ってみたって、帰ってきてみると、「満州乞食」っていう声が耳に入ってきたりね。住宅にはじめて蛇口から水が出るようになったのは、昭和40年。電気は昭和32年。電話は昭和30年。終戦後、満州で厳しい生活をしたから耐えられたと思うけどね。

『証言 それぞれの記憶』より



『満蒙開拓平和記念館』より 熊谷元一写真美術館提供

【⑧団長の息子として生きる ～名取義晃さんの話～】

令和5年7月26日、豊村開拓団長の息子である名取義晃さんの家にかがいで、お話を聞くことができた。義晃さんは、現在、2名の会員となった豊村開拓団遺族会「十七日会」の会長を務めている。

村のためにという思いで団長になったお父さん

名取さんのお父さんは、昭和19年5月から満州豊村開拓団の団長となった。「村のために行ってくれないか。」とみんなに頼まれ、「国策であり、大切なふるさと豊村を守るためには行くしかない。」という思いで、家族をふるさとに残し一人で満州に行った。

お父さんだけでなく、親戚も、義勇軍や開拓団として満州に行ったそうだ。

お父さんとの思い出

お父さんとの思い出はたった一つしかない。昭和20年の正月（義晃さん3才の時）、お父さんは、満州から一度帰ってきた。お父さんが再び満州へ行く時、駅で手を振って見送ったときのこと。お父さんのものは、何も残っておらず、一緒に撮った写真もない。それがさみしいと話してくれた。

お父さんが亡くなってからのお母さんの姿から感じたこと

お父さんが亡くなった時、義晃さんは4才だった。お母さんは、開拓団のことを何も語らなかつたそうだ。無口になったお母さんの姿からは、「何も語らないのは、かなりつらかつたのと同時に、団長の妻として責任を感じていたのだろう。」ということを感じたと話してくれた。

お父さんや開拓団のことはどのように知ったか

お父さんや開拓団のことは、自分で調べたり、まわりの大人の人たちから聞いたりして知ったそうだ。開拓団の人たちは、ソ連の参戦のことは何も知らず、唯一、7月6日の甲府空襲のことを知り、これはまづい状況だと気づいたそうだ。

小さい頃の生活

同じ地域には、戦争でお父さんを亡くした友達もいた。みんな開拓団のことをあまりわかっていなかったから、お父さんのことを言われることはあまりなかった。開拓団が悪いのではなく国が悪いから、「団長の息子」とは言われたけれど、今の時代のいじめのようなことはなかったと思うと話してくれた。

家では、さつまいもや小麦を作っていたそうだ。食べるのに精一杯な生活で、お父さんがいないから、小さい頃からお母さんを手伝った。遊ぶ時間はなかったそうだ。

また、お父さんがいないことで、相談できる人がいなかった。昔から、すべて自分で決めて行動してきた。そうするしかなかったと話してくれた。

生きる支えでもあった「満州へ行くこと」

義晃さんが生きる一番の支えだったのは、満州に行くこと。早く満州に行って、自分の目で確かめたいと思ったそうだ。

日中国交が回復し友好条約が結ばれ、中国へ行けるようになった。昭和54年に山梨県友好訪中団が訪中したときには、阿城までで、開拓団が暮らした場所まで入ることは許されなかった。

名取さんは、昭和55年に、はじめて現地を訪れることができた。写真（写真集『建設第二年の満州国四道河開拓団』）で見たようなきれいな場所なのだろうと想像して行ったが、開拓団が住んでいた場所は、一面雑木林となっていた。農地もなかった。山の形を見て開拓団が住んでいた場所がわかつたそうだ。見える景色は変わっていなかった。しょうゆやみそを作っていた建物の基礎部分だけが残っていたそうだ。そこには、しょうゆやみそを作っていた人たちの名前が刻まれた石も残っていたそうだ。功刀さんの家だったところは、目印だった2本の大きな木が立っていたそうだ。中国には、「慰霊」という名目で行くことは受け入れてもらえず、「日中友好」という名目で行くことができたそうだ。だから観光もした。1人の共産党員が案内役として付きそい、（本当は見張り役）自由な行動はできなかった。中国には、日本のお墓参りのような風習はなく、日本からお供え物や線香を持っていったけれど、唯一、線香をあげることで案内人に目をつむってもらえたそうだ。茶碗など何でもいいから持ち帰りたいと思って案内人に見つからないようにさがしてみたけれど、何も見つからず、唯一、土を持ち帰ってきたそうだ。「自爆を遂げた場所というところで念願の慰霊祭を行うことができた。35年間思い続けてきたこの地を踏み、皆、涙、涙で言葉にならず冥福を祈って手を合わせるのみだった。」と『四道河にねむる拓友に捧ぐ』の中の義晃さんの手記にも書かれている。

名取さんが、再び訪中したのは、平成9年。基礎部分が残っていた場所には中国人の家が建てられ、名前が刻まれた石もなかった。日本人が作ったものは何もなかったが、雑木林の中に、少し耕された土地（田畑）を見る

ことができたそうだ。

満州に行ってわかったことの一つ

豊村の人たちが暮らした場所に行くには、平山駅（ピンシャン駅：開拓団に行くのに必ず利用した駅）から四道河までは6里（約24km）。その間、中国人が住んでいる村を通らなければならない。昔は、一戸の家ではなく、村全体が塙で囲まれていた。村の一つの門を通して村をつきぬけていかなければならなかった。開拓団の人たちが逃げられなかったということが想像できたと話してくれた。

日本に帰って来られた人たちのこと

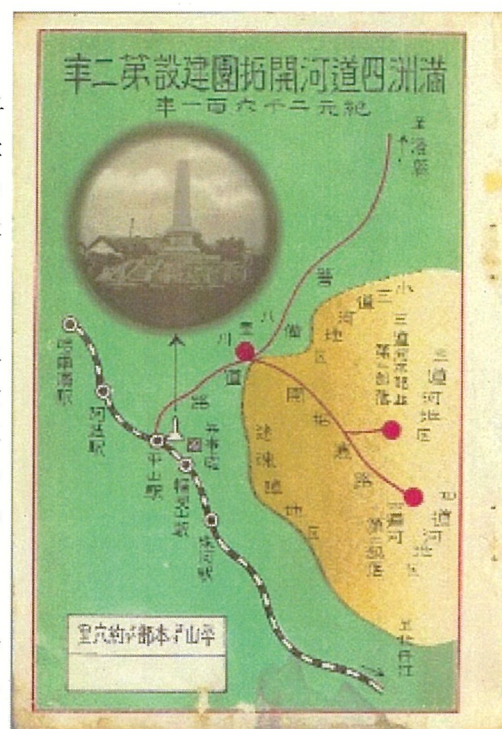
豊村には、満州から何人か帰ってきたけれど、満州に行く前に財産分与をした二男、三男には居場所はなく、別の土地を開拓して生活するしかなかった。北海動に行った人もいた。中国残留孤児として日本に来た人たちについても、同じ理由で、家族とわかっても、名乗り出ない場合も多かったそうだ。

慰霊祭について

毎年8月17日に慰霊祭を行っている。お金を出し合って、昭和32年に慰霊碑をつくった。山梨には、8つの開拓団があったが、最初から慰霊祭をしていないところも多く、現在、慰霊祭をしているのは豊村開拓団だけになってしまった。山梨県には、長野県のようにたくさんの開拓団がなかったせいもあり、開拓団の遺族は、肩身が狭い思いで生きてきたところがあると話してくれた。

これからの人に願うこと

願いは、あった現実を伝えていくこと。開拓団を知らない人も多い。みんなに知ってほしい、こんなつらいことが二度とないようにと話してくれた。



『建設第二年の満州国四道河開拓団』より

【⑨感想・考察】

僕は、本を読んだり、豊村開拓団長の息子である名取義晃さんと話したり、満蒙開拓平和記念館を見学したりして、人のおろかさが悲劇を起こしたということがよくわかった。人々の思いにつけこんで満州に行かせた当時の政府は最低だと思う。満州行きをすすめた人も、家族や仲間を殺した人も、その人自身は悪くないと思う。国のためにとか、村のためにとか、みんな必死だった。

義勇軍を送り出した先生の中には、なんでこんな少年たちを満州に行かせるんだと反対する気持ちでいた先生もいた。

「満蒙開拓平和記念館」の展示で、満州移民に反対した政治家がいたことを知った。それは、高橋是清大蔵大臣。高橋さんは、二・二六事件で暗殺された。その後すぐに満州移民は国策となった。

戦争に向かう勢いの中では、正しい考えが通らなかった。戦争の中では、多くの人が冷静ではいられないんだと思った。戦争が、その時の国の勢いが、人を変えてしまうことの恐怖を感じた。こんなおろかなことが国策になってしまったことが残念でたまらない。

日本人に土地や命をうばわれた中国人も、当然、開拓団の犠牲者だと思う。本を読んで、日本人と最後まで仲のいい関係が続け、涙で別れた中国人がいたことや日本人の物は奪うが命は奪わなかった中国人がいたことに驚いた。反日感情を持つ中国人が、開拓団を攻めてきた時、八路軍（日中戦争時代に華北で活動していた中国共産党軍）が助けてくれたという事実があったことも知った。証言集にも、中国人に助けられたことが書かれていた。中国人は、日本人に負けにくいくらい情が深かったことが。国と国との関係が、人と人との関係をこわしていったのだと思う。

戦争に向かう時、戦争の時代、国と国民の関係は、それぞれの立場によって、気持ちに差があったと思う。国民は、国の考えに従わないといけないから、自分の気持ちで動けないんだとわかった。今のロシアも、こういう状況になっているのかもしれない。すごくおそろしいことだと思う。自分の気持ちをちゃんと言える、だめなこととはだめと言える社会じゃないといけないと感じた。

集団自決は、絶対にしてほしくなかったけれど、人とのつながりが強い村で、同じ村の大事な命だからこそ、その時、他の人に殺される道は、絶対を選ぶことができなかつたんだと思う。「豊」という村の名前の通り、家族、地域の人たち、お互いを思いやる心が豊かなすばらしい村だったのだと思う。

そして、昭和55年発行の『満洲開拓史』には、「何故か、敗戦後今日にいたるまで二十年間、日本政府も取り上げず、また、国連も、そして世界の世論も取り上げないのである。この、誰もが取り上げないが、十万人の人々

の非業の死をとげた事実は、その家族、その関係者には永遠に記録されて、消えることのない悲惨な事実、冷酷な事実なのである。」とある。「国のため、村のため」と思って満洲に行った人たちが、かわいそうでたまらない。

戦争というと、広島、長崎の原爆とか教科書でならったことを思い浮かべるけれど、身近にこんなにつらい戦争があったことを知らなかった。8月17日、はじめて慰霊祭に参加した。名取さんが話してくれたように、この事実を後世に伝えていきたいけれど、誰にどんなふうに伝えていけるのか考えた。身近な人にはもちろん伝えられる。でも、多くの人に知ってもらうためには、学校で、戦争や平和の勉強をするとき、自分たちの地域の戦争についても調べる学習をするといいと思った。

義晃さんは、「今はもう中国へは行きたくない。政権がかわっているから。」と話してくれた。本当は、行けるものならまた行きたいだろうと思った。すごくさみしそうな気持ちが伝わってきた。日本とか一つの国だけで平和を考えていても平和な世界はつくれないと思った。世界中の国が、いっしょに、それぞれの国に住む人たちがのぞんでいる平和を考えていかなければいけないと思った。

【訪れた場所】



【南アルプス市 諏訪神社 満州開拓殉難者慰霊碑】



【甲府市 護国神社 満蒙同胞殉難慰霊碑
左奥は、満蒙開拓青少年義勇隊の碑】



【令和5年8月17日 豊村開拓団慰霊祭
南アルプス市 諏訪神社にて】



【長野県阿智村 満蒙開拓平和記念館】

【出典・参考文献】

- ・『豊村』豊村編纂委員会
- ・『満洲開拓史』満洲開拓史復刊委員会編
- ・『山梨県史 資料編 15 近現代2』山梨県
- ・『四道河にねむる拓友に捧ぐ』豊村満洲開拓団誌編集委員会
- ・『山梨満洲開拓団小史』小林春雄
- ・『証言 それぞれの記憶』満蒙開拓平和記念館
- ・『満蒙開拓平和記念館』満蒙開拓平和記念館
- ・『満蒙開拓の歴史』満蒙開拓平和記念館
- ・写真集『建設第二年の満洲国四道河開拓団』昭和16年拾月 満洲国四道河開拓団
- ・『山梨日日新聞2002年（平成14年）8月17日土曜日〈豊村満洲開拓団 集団自決の夜4〉』
- ・DVD『山梨放送戦後70年特別番組 戦後は終わったか・・・旧豊村満洲開拓団の悲劇』
平成12年12月31日放送 制作：山梨放送報道部 鈴木秀人氏
- ・『南アルプス市ふるさとの誇り169まる博レポート 忘れてたくない記憶～豊村満洲開拓団集団自決～』
南アルプス市文化財課
- ・『ふるさと山梨』平成20年版・平成29年版 山梨県教育委員会